

# し ゃ べ る む く 鳥

寺 坂 亮

朝の目ざめとともに美しいカナリヤの鳴声にまじつて、むくどりのマイドアリガトウゴザイマス、ピピピゴメンクダサイなど、おもしろいほどさえする。三年たつてもまだ自分の、鳴声を知らないのだ。

私がこのむくどりを飼い始めたのは、昭和38年6月の上旬、近所の家へ舞いこんだのを、子供たちがつかまえて遊んでいた。死んでしまってはと思ってもらつて来た。手に持つと、びっくりしたことには、やつと見えるか見えないくらいの、羽虫が何百何千、かず知れないほど、手首にはい上がり、気味悪かったことをおぼえている。家へ持つて帰る。鳥かごへ入れる。しょんぼりしてえさも食べない。鳥店へ行きえさを聞く。すりえだといわれ、作つてやつたが食べない。口をむりやりあけ、水で流しこんでやつた。もう死ぬのではないかと思われたが、夕方ごろ大きな口をあけチチチと鳴いた。そのとき、まだ自分でえさを食べられないのだとわかつた。魚串の先を削り、先きにえさをのせ食べさせた。今度は上手に食べた。その後十日分～三十分に一度ずつ、始め日は夜も食べさせた。むくどりの大きさは飼い始めも今も大して変わりはない。多分巣立て失敗したのだろう。

10日ほどかごの中え入れて置いたが、私の仕事場へ放し、仕事をしながらえさをやる。えさの入物がなかったので、あり合わせのかんずめのあきかん。「色は赤」でやつた。おもしろいことには、鳥の巣箱を作つた時に、えさの入物「せと物の白色」を買ってえさを入れてやつたが食べない。何にか落つかない様子なので、元のかんずめのあきかんにしかえると、普通に食べる。今でも入物がいたむと、赤いかんずめを買って来て、そのあきかんでやる。

1ヶ月も世話をしていると、大分慣れて來た。えさがほしくなると、手の上に飛んで來てせがむ様になる。この鳥はものすごく大食で、すりえを300円ほど買ってきても、5日ともたない。小鳥屋ではそんな鳥を飼つても、しようがないだらうと笑われた。家では室内が大してきれいでもない。鳴きもしない鳥、1人でえさを食べられるようになったら放してやつたらとも言った。私は大の動物好きだ。放して死んだらと思うと放す気にならない。私は飼うこととした。そんなある日、金魚とカナリヤのえさを買ひに、小鳥飼料店にいった。その時むくどりとひよこの大きさは、同じくらいだからと思い、ひよこのえさを少しためしに買った。栄養はすごくあるそうだ。水でといて食べさせる。今までのすりえとひよこのえさの2つを同じに入れてやつたが、ひよこのえさもたべた。それから今に至るまで、そのえさで育つてゐる。このえさは300円も買うと

二ヶ月半くらいある。九官鳥もこのえさで育っている。

昭和39年の春3月ごろいつものように部屋の中で肩や手に止つて遊んでいた。そんなとき、家の肩止って、耳たぶをついたからたまらない。家内は大きな声でイタイと言ったところ、ケキヨーとかたい大きな声で鳴いた。笑いながらこの鳥、まねをするかも知れないと話しながらアイタ、またはイタイと何回も繰り返したところ、そのつどケキヨーとしゃべりだし、だんだんとはんとうの言葉、アイターと一番始におぼえた言葉をしゃべりはじめる。このころから私の後についてくるようになり、私が外へ出れば外、家へ入れば家中へと私の行く所へ飛んで来るようになった。巣箱にはいっている時も近くを通ると、ものすごく大きな声で、鳴いて私を呼ぶ。むくどりチーコのそばへ行ってあいそをしてやると、ものすごく鳴いて喜ぶ。私でなく私宅にいる犬のサブ、チビとともに仲よく遊ぶようになった。

昭和39年6月下旬ころから鳴かなくなり、私もがっかりしていた。十月ころからまた鳴きにかかり、その声がブツブツグツグツ不平不満でもいっているようにも聞こえる様子。変った鳴き声を出すようになつた。そんなとき私の母が鳥の発音が何か、マイドアリガトウゴザイマスのような発音だというので、聞いてみると、言葉はわからないが、マイドアリガトウゴザイマスという発音に似ているように思われ、気をつけていたところ、だんだんはっきりしゃべりだした。このむくどりは朝の気げんの良い時に来る。御用聞きのクリーニング屋の奥さんが毎日特別上手な発音で、毎度有難うございますという言葉や、その他家のお客様のごめんくださいを自然とおぼえたのだろう。

昭和40年の6月下旬頃まで、マイドアリガトウゴザイマス、ねこの鳴声のニヤゴー、アイタ、ゴメンクダサイ、犬の名のサブ、チビ、口笛のまね、私の子供の名前カヨチヤンなど上手にしゃべっていたが、七月ごろからまたびったりとしゃべらなくなり、折角しゃべるようになったのにと残念に思っていたところ、また十月ごろから翌年六月ごろまでしゃべっていた言葉を、今度は最初からはっきりとしゃべり出し一度おぼえた言葉は、忘れないのだということを知った。家の者よそから来たお客様の区別をし、まったく頭の良い鳥だとつくづく感心している。このたび、私はこの鳥が何の鳥かを知らずに何年も飼っていたが、博物館へ知らべに行き、むくどりだと知った。そして言葉を話すむくどりも珍しいのだと知った。

私はこのチーコに鳥というより家族の一員として育てて来た結果が、このような鳥に育ったのではないだろうか。家には二羽の鳥と二匹の犬サブ、チビが毎日仕事場でなごやかに遊んでいる。かごの中ではカナリヤが楽しそうにさえずり、全く楽しいわが家である。